

# **くものいと No. 21**

**KUMO NO ITO**

**December 31, 1996**

**関西クモ研究会**

## くものいと21号目次

加村隆英：	千島列島探訪記	1
東條 清：	雨の日のクモ採集紀行	5
河井安子：	採集会に参加して	8
西川喜朗：	追手門学院大学内のトタテグモ類	8
長谷川夕希子 vs 畑守有紀：	タランチュラ対談	10
吉田 真：	関西クモ研究会例会の報告	12
近況報告		13
くものいと20号正誤表		15
会計報告		16

# 千島列島探訪記

加村 隆英

今年 (1996 年) の夏, 私は千島列島の生物調査に参加する機会を得た。このプロジェクトはアメリカのワシントン大学が中心になって行っているもので, ロシアと日本の研究者を交えて, 3 国共同で, 4 年間かけて千島列島の生物多様性を調査しようというものである。今年はその 3 年目で, おもに千島列島の北部を調査した。ウラジオストクからロシアの調査船, その名も「アカデミック・オパーリン号」に乗り込んで, 30 日あまりの船旅であった。

## 《いざ千島へ》

7 月 24 日に私は大阪を立ち, 新潟に向かった。ここで日本からの参加者 5 名が落ち合った。私以外の 4 名は, 北大水産学部の矢部さん (魚類担当), 北大農学部植物園の高橋さん (植物担当), 小樽市博物館の大原さん (昆虫類担当), 網走水産試験場の桑原さん (貝類担当) である。矢部さんは今までに何度もロシアを訪れた経験のある方で, また, 他の 3 人は今年のこのプロジェクトに参加しており, 今年が 2 回目である。他の方々が経験者ということで, ロシアが初めての私にとっては心強かった。(ちなみに, 去年はクモ類担当者として鳥取大学の鶴崎さんが参加されている。)

翌日, アエロフロート航空でウラジオストクに向かった。ここで 3 国の研究者が集結し, いよいよ千島に向けて出発するのである。アメリカ隊の到着がやや遅れたため, 7 月 27 日の夕方にオパーリン号はウラジオストクを離れ, まる 4 日近くかけて, 7 月 31 日の午後にパラムシル島のセヴェロクリリスクに到着した。

航海の途中でミーティングがあり, 参加者が紹介された。研究者は日本隊の 5 人を含めて, 全部で 39 名。女性の研究者も少なくない。ロシア側からは, 地質学や化学の専門家も参加しており, まさに多士済々といったところ。これら研究者以外に, 食事の世話をしてくれる人たちや掃除のおばさんなども含めて, 船員が 30 人ぐらい乗り組んでいた。

さて, ロシアとアメリカのクモ学者について紹介しておこう。ロシアからは, エスコフ氏 (Kirill Eskov)。彼はモスクワ在住で, 専門はサラグモ科の分類である。アメリカからは, クロウフォード氏 (Rod Crawford)。彼はクモ全般およびザトウムシを研究しているとのことであったが, 一番興味があるのは, エスコフ氏と同じく, 小型のサラグモ類であるらしかった。

## 《船内の生活》

船内の居室は原則的に2人部屋である。二段ベッドのほかにソファー、1人用の机と洗面台（お湯も出る）があり、さらに、小さな冷蔵庫もついている。かなり狭いものの、予想していたよりはるかに快適な部屋であった。また、別の場所には、いくつかのラボがあり、研究者たちはここで仕事ができる。

船内では毎朝7時にロシア語で放送があり、これが一応の起床時間。食事は食堂のスペースが少ないので二部制になっていて、我々日本隊は第2部で、朝食は8時からであった（第1部は7時半から）。夕食は午後8時。移動日などで一日中船にいるときは、昼食が12時で、午後4時にはお茶の時間があった。

朝食のメニューはソーセージかチーズ、たまに目玉焼きが出る。昼食と夕食には必ずスープがつく。ボルシチ風のトマトベースのものや魚や豆などのスープが多かった。メインの料理は、ふつうの牛肉やとり肉も出たが、けっこう多かったのがレバーである。ミンチ肉とお米の交ざった丸いハンバーグ様のものもあり、一見おはぎに似ていたので（味は全然ちがうけど）、我々日本隊は「肉おはぎ」と呼んでいた。料理は全体に油っこく、最初、私はこの油が体に合わず、お腹の具合が悪かった。

メインの料理にはたいがい穀類がついていたが、米飯のことはまれで、よく出てきたのは、アワやソバの実を茹でたものである。アワはべちゃべちゃしているし、ソバはぼそぼそしているし、決してうまいものではなかった。

食事の時の飲み物は紅茶か、カンポットという少し甘い茶色の飲み物。これはドライフルーツを煮出して作るらしい。また、パンは毎日厨房で焼いたものが出て、好きなだけ食べられる。このパンは日本の食パンのようにやわらかくなく、もっと弾力があって、その味はとても良い。メインの料理が口に合わない時でも、パンだけはおいしいのでなんとかなるのである。

## 《上陸開始》

今回の調査では、千島列島北部のパラムシル島から順次南下して、マツワ島までの大小合わせて8島と中部千島のウルップ島に上陸した（一部のメンバーはさらにエトロフ島とクナシリ島にも上陸）。

上陸する島の多くは無人島であり、また、人の住んでいる島であっても、ちゃんとした船着き場があるとは限らない。オーバーリン号から2艘のボート（1艘は20数人乗りの木製のボート、もうひとつは7～8人乗りのゴムボート）に乗り移り、できるだけ波の少ない、入り江の奥などを選んで上陸するのである。もちろん、上陸用ボートはロシア側のスタッフが操縦してくれる。

岸に打ち寄せる波がかなり高いこともあり、そういうときの上陸はけっこう

たいへんである。腰まで水につからなければならないこともあるので、上陸の際は胴長靴を履く。荷物がずぶ濡れになることは最初から覚悟しておかねばならない。

天候や風向きの具合によっては、予定どおりに上陸できないこともある。ボートに乗って島に近づいてみたものの、岸の近くの波が思いのほか高いので、いったんオパーリン号に戻って波がおさまるのを待ったり、また、波の少ない上陸可能な場所を探して、ボートに乗ったまま1時間以上うろうろするということもあった。

### 《採集の風景》

上陸するとすぐに研究者たちは思い思いの場所に散らばって、採集を開始する。水生昆虫をやっている人たちが事前に地図上でめぼしをつけておいた湖や沼地に急ぐということもあるが、多くの場合は島に上陸してからあたりのようすを見回して、自分のやっているグループがいそうな場所で採集を始めるということになる。

島には大きな樹木はまったくない。よく目についた木本類はミヤマハンノキで、それでも高さはせいぜい人の背丈ほどである。あとはほとんどが草原である。草本類の多くは花をつけており、いわゆるお花畑もたくさんあった。

樹木が少ないので、コガネグモ科やアシナガグモ科などの造網性のグループは少なく、クモに関してはいきおい、地面を探ることになる。石を起こしたり、植物の根ぎわをかき分けたりして見つかるのは、その多くが小型のサラグモの仲間である。場所によっては、コモリグモ科やフクログモ科もある程度採集されたが、私が好きなワシグモ科はととも少なかった。

私が使っているシフティング用のざるは、台所で使う食器の水切り用のものであるが、クロウフォード氏はネコのトイレ用のトレーの底を切り取って金網を張った手作りのざるを使っていた。また、エスコフ氏はふとんのシーツほどもある大きなビニールシートを持ってきており、その上に地面からはぎ取ったコケや草などを広げて、寝転がった姿勢で、這い出すクモを拾い上げていた。私もまねをして、大型のポリ袋を広げてやってみた。たしかに場所によっては、小さなざるでいちいちふるうよりは効率的な採集方法である。

ところで、ブユの類がさぞかし多いのだろうと思っていたが、北部の島々にはブユはほとんどおらず、防虫ネットを必要としたのは、やや南のウルップ島だけであった。

### 《お昼のひととき》

上陸に際しては、昼食用にサンドイッチを持たされることもあったが、たいていは、お昼の支度をしてくれる2人の女性と医師が1人同行してくれる。上陸するとすぐに食事の予定時刻が知らされて、研究者たちは散らばって行き、彼女たちはたきぎを拾って川の近くで火を起し、昼食の準備を始めるのである。

ここでの昼食はおもにスープとパン。バターやジャムもあるし、紅茶やミルク入りのコーヒーも飲める。採集ではけっこう体力を消耗するし、概して気温も低いので、ここで食べる温かい食事は本当においしかった。日によっては、韓国製のインスタントラーメンが出ることもあり、これまた、唐辛子がきいていてなかなかうまいのである。

### 《千島の風景》

1か月以上の船旅を経験するのは始めてだったので、いったいどうなることやらという若干の不安もあったが、船酔いに苦しむこともなく、9月2日に無事に大阪に戻ってきた。

さて、日本に暮らす我々にとって、千島列島というのは、北の寒い海に浮かぶ荒涼とした島々というイメージがある。今回、実際に訪れてみて、たしかにそのイメージに近い風景にも遭遇したが、季節が真夏であったこともあり、漠然と想像していたよりは、はるかに明るいところだという印象を持った。

島によってその表情は少しずつ違うが、共通していることは、樹木が少ないということである。したがって、島内はどこからでも見通しがよく、たいへん開放的に見える。天気の良い日に斜面の中腹からながめれば、空も海も青く、足元には花が咲き乱れて、美しい。上空には絹雲が浮かび、夏の日本で見られるような積乱雲はない。澄んだ秋の空である。

全般的に涼しいとはいえ、晴れた日に胴長靴を履いたまま行動すると暑くて、汗をかくこともあった。

もちろん、雨が降ったり、霧がかかることも多いが、それは陰鬱な暗さというよりは、静寂に通じるものであって、人間社会の煩わしさを一瞬忘れさせてくれるような好ましさを感じた。

開発の進む日本ではもう出会うことのできない、文字通り手つかずの自然に接することができた。貴重な体験だったと思う。

## 雨の日のクモ採集紀行

東條 清

関西クモ研究会主催の採集会を6月9日に奈良県御所市河内葛城山頂付近で行うという案内状をいただいた。午前10時10分に近鉄御所駅集合。電車で来られる人は近鉄南大阪線阿倍野橋駅9時20分発の急行に乗り、尺土駅で各停に乗り換え。御所駅には10時05分着となっていた。

大阪回りの電車より車の方が早いと思ったので、私は自家用車で行くこととした。うっとうしい天候で、海南地方では6月7日午後6時頃より雨。天気情報ではこの日、山口県・北九州・四国は梅雨入り。翌8日には近畿・中国が梅雨入りで、雨が終日降ったりやんだり。昨日からの雨量は、海南市の我が家の雨量計で15.7mm。

こんな状況だから明日の採集会は中止だろうと思い、お世話していただいている山野先生に数回電話したが、ご不在で連絡が取れない。そこで加村先生に電話する。先生も明日の天気が気がかりで、どうなるか迷っておられる様子。しかし、少しの雨であれば決行するであろうということであった。私も、雨の中での採集は何度か経験しているので、まあやれるだろうと思っていた。校長をしていた頃、遠足や修学旅行の前日、生徒たちから「明日雨やったらどうなるの」とよく聞かれた。「明日は雨は絶対に降らん」と必ず言ったことを思いだし、苦笑した。

当日は6時前に起床。屋外に出たが雨は降っていない。空を見上げると、薄い雲が広がっているが西の空は明るい。海南地方では、西の空が明るくなると、その日の天気が良くなるのが普通である。

よし、これなら奈良方面も大丈夫だろうと、一人で決め込んだ。朝食もそこに7時過ぎ、自家用車で家を出る。2時間半ぐらいかかると思っていたが、日曜日にもかかわらず渋滞もなく、御所駅には9時少し前に着いてしまった。曇っていたが雨は降っておらず、日曜日とあって乗降客も多い。その人波の中から聞こえてくる会話から、自然探訪や採集会に出かける人も多いことが伺えた。

9時半も過ぎ、それらしい2、3人に「関西クモ研究会の方ですか」と尋ねてみたが「いいえ」という返事。やっぱり今日の天気ではやめた人も多いかもしれんなあ・・・と思う。10時05分までにまだ時間があるので、駅付近のクモの観察をしようと、クモのいそうなところを探してみたが、ヒラタグモの住居がところどころにみられるぐらいで、他のクモは見つからなかった。

やっと 10 時 05 分の電車が着く。これが最終かと思って目を凝らしてみると、後の方から田中先生と加村先生のにこにこした顔が見えた。「あ、よかった」これでひと安心。お二人の先生から「他の人は来られていませんか」「いや誰も・・・」と言葉を交わしながら、しばらく待つことにする。

「あ、ひょっとしたら吉田先生が車で来られるかもしれませんね」「電車で遅れてくる人もいるかも分かりませんね」とお互い希望的思考で、30 分ほど待ってみたが、結局最後まで誰もみえなかった。

そこで、3 人で採集会をやろうと決心。この分だと天気もだんだん良くなってくるだろうと話し合いながら、バスに乗りこむ。料金は片道 250 円。バスの窓から、水田に植えられて間もない稲がそよ風に動く様があちこちにみられ、のどかな田園風景が目飛び込んでくる。約 20 分で終点に着く。そのすぐ上は葛城ロープウェイの駅になっている。売店もあり、土地の名産物も幾種類か並んでいる。ロープウェイに急いで乗り込むと中は満員。何とか空席を見つけて座る。

ロープウェイは片道 600 円。チケットの案内書によると、昭和 42 年 3 月 26 日の営業開始、形式は 3 線交走式・毎秒 5 メートル、高低差 561 メートル、ロープ傾斜長 1421 メートルとなっている。短い距離であるが、外の景色を見ると、傾斜の大きいのがよく分かる。高さが増すにつれ、車窓から見える景色はまさに水墨画。終点に着き、3 人はそれぞれ採集用具を出したり、身につけたりして出発する。

大木の洞の中・幹・根、木々の葉の表裏、草むらなど丹念に調べながら山道を登る。ところが、途中から雨が降り出した。頂上近くまでたどり着いた頃には雨粒も大きくなり、ガスも立ちこめてくる。こうした中でも 3 人は、黙々とクモ探しをする。時々ピーティングで葉をたたくと、雨粒がかたまって落ちてくる。

昼近くなったので昼食の場所を探す。頂上近くのロッジは予約制になっており、ていよく断られた。仕方なく、もと来た道を引き返す。雨足も強くなってきたが、適当な場所が見あたらない。しばらく歩き、道のそばに露天商の空屋台を見つけた。ここで昼食をとることにする。屋台には粗末ながらも屋根があり、立ったままの食事であったが、激しくなってきた雨を何とかしのぐことができたのは幸いであった。

何とか食事を済ませ、休むことなく 3 人で再び採集に出かける。自然研究路（葛城のこみち）を一つ選び、そこを歩きながらの採集である。雨は相変わらず降り続けているが、自然林の下であるので、さほど強くは感じない。ところどころで立ち止まり、植物の観察も行う。



この研究路は、一度谷まで降りてから次の峰へと、稜線に沿って続いている。急な登りもあり、雨具をつけているので、身体はもちろん汗でベタベタ。頭や顔からも汗が流れ落ちる。それでも3人は目を輝かせ、クモ探しに余念がない。こうして午後3時頃もと来た道に到着し、ロープウェイの駅にたどり着いた。

この日私が観察・採集したクモは次の通りであるが、気温がまだ低いせいかな種類も少なく、幼体も多かった。

ヒメグモ科

オオヒメグモ                      ♀ 多数

ヒメグモの一種                      幼体

サラグモ科

ツリサラグモ                      幼体

コガネグモ科

ヤマオニグモ                      幼体

カラスゴミグモ                      幼体

ヤマシロオニグモ                      幼体, ♀ 普通型, 背白型

アシナガグモ科

オオシロカネグモ                      幼体

タナグモ科

クサグモ                              幼体

カニグモ科

ワカバグモ                              ♀

不明種 1                      幼体

不明種 2                      幼体

## 追手門学院大学内のトタテグモ類

西川 喜朗

1995年度の本会の会合で、畑守有紀さんが「自宅のまわりで見つけたクモを記録していこう」という呼びかけをされた。普通種でも採集記録の報告がないものが多いので、「我が家で採集したクモ」のような断片的な記録でも、積み重ねればファウナの整理や解明の参考になる。そこで今回、私の勤務先である追手門学院大学内で確認されたトタテグモ4種について報告する。

採集地はすべて、大阪府茨木市西安威2丁目の追手門学院大学の敷地内で、標高は35m～60mである。この大学は、北摂のアカマツ林の丘陵地の裾から中腹の一部を切り開いて、1966年4月に開設された。学内のところどころには、少しアカマツが残っている。

### 1) キシノウエトタテグモ *Latouchia typica* (Kishida)

1994年秋、標高55mの、大学開設以前からあったと考えられる地肌の斜面に生えているアラカシの根元に住居を1個確認した。住居内にクモはいなかった。

### 2) キノボリトタテグモ *Ummidia fragaria* (Doenitz)

1996年5月14日、2号館前の階段の下部(標高60m)で徘徊中の1♂を採集。階段の上には、数本のサトザクラと約10本のヒラドツツジが植えられている。本種のオスは普通、5～7月に徘徊していることが多い。クモを発見した2日前の5月12日(日)午後付近一帯に殺虫剤のスミチオンが散布されたが、その影響で住居から出てきて徘徊したものかもしれない。

### 3) ジグモ *Atypus karschi* Doenitz

約10年前から、大学正門横のケヤキやイヌマキなどの生け垣の根元に10個あまりの住居が見られる。標高35m。ここのジグモは生け垣の植木に付いてきた可能性が高い。日本各地に植栽されているツツジなどの根元にもジグモの住居がしばしば見られるが、これらも植木とともに人為的に移動している可能性が非常に高い。なお、「くものいと」20号で報告した未婚のジグモ(西川, 1996)の生息場所とは、約300m離れている。

### 4) ワスレナグモ *Calommata signatum* Karsch

1993年10月9日と1996年10月2日に、それぞれ1♂を採集。どちらも1号館前の広い階段の下部を徘徊していた。メスの住居を探して徘徊中の個体と思われる(新海, 1969)。標高約55m。この階段の横には、アカマツやアラカシが生えている。

ワスレナグモのオスは小さくて黒いので、一見アリのようなものである。桂ら(1993)

は大阪市西区の靱公園において、1992年9月6日に徘徊中のみを、子グモの旅立ち（まどい）を、1990年8月19日と1992年8月16日・8月23日・9月15日に観察している。これらは大阪市内の貴重な記録であるので、あわせて紹介させていただいた。

#### 引用文献

- 桂孝次郎・奥野晴三・山本博子. 1993. 靱公園の自然. pp.196. 靱公園自然探求グループ, 大阪.
- 西川喜朗. 1996. 未婚のジグモの長生きの記録. くものいと, (20): 10.
- 新海栄一. 1969. 東京都産真正蜘蛛類. pp.65, pls.10. 東亜蜘蛛学会, 大阪.

## 採集会に参加して

河井 安子

10月6日、関西クモ研究会に入会してはじめての採集会である。ワクワクしながら天王寺に向かう。今回はピクニック気分での参加である。

葛城山に到着し、ロープウェイで山頂へ。昼食後、少し下がって採集に入る。しかし、思ったほどクモがいない。ワカバグモはたくさんいる。脱皮直後のワカバグモは腹部の色彩が鮮やかで、別の種かと思ってドキドキする場面もあった。ずいぶん歩くが、網を張っているクモが少ない。

雨の後で山肌が湿っているせいか、キノコの類が多い。はじめて見る珍しいキノコを多く目にした。キノコの研究もしていたら良かったと思う事しきり。

今回はクモの収穫はあまりなかったが、珍しいザトウムシと出会い、加村先生や西川先生の採集器具を見せていただいて、勉強になった一日であった。

## タランチュラ対談

長谷川 夕希子&畑守 有紀

くものいと17で加村隆英先生が大阪税関より同定依頼を受けたタランチュラは、檀原昆虫館などに里子に出されました。私達（長谷川&畑守）もその時についでに貰い受けていたのですが、餌を食べたり脱皮をしたり、日、一日とすぺしゃる・うるとら・すーぱー・ぷりちいーに育っていく彼女（もしかしたら彼）等に親バカぶりを発揮してしまう私達でした。

Q 1 まずお名前は？

A 夕：タランティーノです。

A 有：ランちゃんです。

Q 2 どんな餌が好き？

A 夕：うちの子はとても好き嫌いがはげしいので、悩みの種はいつもこれです。刺し身はマグロを食べましたが、某寿司チェーン店の刺し身は食わず、魚屋さんの新鮮なものしか食べません。刺し身に飽きた頃に肉をあげましたが、これも豚肉とか、古くなった肉は食わず、国産牛しか食べませんでした。今はコオロギが好物です。最初はとても怖がって、コオロギが身体の下に来ても、たかたか（脚をいっぱい伸ばして立っている様子のこと）をしてビビっていましたが、一度ビビりが頂点に達した時に嘔みついでからは、餌と認識したようです。ちなみにスイカは、嘔みついた跡はあったのですが、汁を吸う程度のようなようです。

A 有：うちの子は粗食に耐えてますから何でも食べます。夏はアブラゼミが好きでポリポリ音を立てて食べてました。秋はエンマコオロギをやっていたのですが…まあ食べます。でもイナゴにキックされてからは脅えてしまって…イナゴの後ろ足をとってやってもしばらくは手を出しませんでした。冬はときどきササミやサシミを目の前でブラブラするとぐわしっと嘔付きます。後は…非常食でミールワームをやることも。

A 有：大きめの水槽（60cm×40cm くらい？）の中に、土と落ち葉をいれてい  
ます。水入れとしてイチゴパックを土に埋めてます。お気に入りなのか、普段  
は水入れのそばが定位置です。でも水を飲んだ姿をはじめて見た時は、水没し  
て死んでるかと思いましたが…頭を全部水入れに突っ込んでいたので、寒さ対策  
は、トカゲ用の暖まる石を今年入れましたが、調子よさそうです。と、いつて  
もランちゃんがそばによってくるわけではなくて、イナゴたちのほうがヒッチ  
コックの「鳥」のように群がってました。夏は何もしなくても元気です。

A 夕：うちの子も、水入れのそばがお気に入りです。水を飲む姿は、けっこう  
まぬけですよ。

Q 3 どんな飼育容器  
で飼育してますか？  
また冬の寒さ対策や  
夏の暑さ対策は？

A 夕：二度脱皮したにもかかわらず、残念ながらその瞬間は見えていません。二  
度目の時はその直前まで見ていましたが、ひっくり返ったままかなり時間が経  
った（母いわく、一度目の時はひっくり返ってからすぐに脱皮した）ので、死  
なせてしまったと思いましたが。水入れの水が全部なくなっていたのでそっと口  
元に水をかけてみると、脚が動いたので「脱皮だ！」と思いましたが。もしかし  
たら、かなり弱っていたので、私のかけた水は、ラグビーでいう“魔法の水”だ  
ったのかも……。

A 有：去年、私の所ではわざわざ脱皮のためにひっくり返っていたのを元に戻  
してしまいました…ゴメン。悪い事したなあ…。おかげでそのタラちゃんは御  
隠れになってしまいました。今年、ランちゃんは、脱皮前に地面に糸をネット  
の様に張ってから脱皮しました（脱皮の瞬間は私も見てないです。残念！）。  
それにしても脱皮するとハゲがなくなって嬉しい。

A 夕：そうそう、脱皮するとハゲがなくなって、見違えたようになりますよね。

Q 4 脱皮の様子や前  
後の調子はどうでし  
たか？

Q 5 最後に一言どうぞ。

A 有：ウチのはちょっとシャイなお嬢さんタイプなので、加村先生、次  
はカッコいいお婿さんを紹介して下さい。

A 夕：少し前に餌に入れていたコオロギの雌が、食べられる直前に産卵  
していた様で、つい最近孵化してしまい、時々タランティーノがこそば  
ゆいらしく、痙攣を起こしているような動きをします。……

……コオロギの復讐？

# 関西クモ研究会例会の報告

吉田 真

1996年12月15日に大阪・天王寺の四天王寺高校で例会が行われました。参加者は14名。徳本さん・大崎さん・小笠原さんなど、遠方から来られた方もいて、なかなかの盛会でした。

## 役員会

11時から役員会が開かれ、以下のようなことが話し合われました。

### 1) 会員数

会費未納の人も含め、現在55名。会費納入が平成6年度以前までの会員については、請求書を送る。住所変更をされる方は、本部宛にその旨を知らせていただきたい。

### 2) 「くものいと」の編集

21号は12月に発行しなければならないが、まだ原稿が少ししか集まっていない。依頼原稿も含めて原稿を集め、1997年の1月には発行したい。「くものいと」をオフセット印刷にしたいが、印刷費がいくらかかるか、会費の値上げが必要か、などを試算して、見通しが立てば来年(1997)の総会に提案したい。

### 3) 役員体制

来年度の体制を以下のように提案する：

会長：山野忠清（現：西川喜朗）

編集：吉田真（現：吉田真・畑守有紀）

庶務：加村隆英（留任）

会計：河井安子（現：山野忠清）

なお、顧問を新設し、西川喜朗が就任する。

### 4) 年間行事

#### ①採集会

来年度は滋賀県で行う。採集日は1997年、6月8日（日）、10月5日（日）、1998年3月21日（土）。場所はこれから選定する。なお今年度最後の採集会はすでに案内しているように、1997年3月23日（日）近鉄御所駅10時10分集合。

#### ②例会

1997年12月14日（日）に四天王寺高校で行う。

## 例会

以下のような研究発表がありました：

- 吉田 真 人工網とクモの網にかかった餌 - EXCEL による解析  
加村隆英 千島列島探訪記  
榊元敏也 集合性ウズグモ *Philoponella raffrayi* における共同捕獲  
西川喜朗 オーストラリア探蛛行とゴケグモのその後  
徳本 洋 ジョロウグモの産卵

## 総会

研究発表の間でちょっと時間をとって、総会が開かれました。役員会の提案は、ほぼ原案通り承認されました。各人の近況報告も行われました(別項参照)。

## 近況報告

12月15日の関西クモ研究会の例会に参加された皆さんに、近況をお聞きしました。

### 大崎茂芳さん

松江に単身赴任して1年9ヶ月になりました。いままで趣味でやっていましたが、そろそろ趣味を本格的に研究しようという段階になりました。家族は大阪市内に住んでおりますので、たまに大阪に帰ってきます。会合には、機会があれば参加させて頂くつもりです。

### 西川喜朗さん

セアカゴケグモの騒動が一応落ちついて、ホッとしています。このクモの有名な産地では個体数が激減していますが、地域的には少しずつ広がっているようです。大阪府は今後も分布調査と駆除を継続する方針です。お互いに事故を起こさないように注意しましょう。

### 徳本洋さん

昨1995年春に、NHK金沢局に配属されてきた若いディレクターがクモの生態に強い関心を持ち、何かとうるさくやってきます。この秋には独力でジョロウグモの産卵を撮影するまでになりました。来年はもう少しいろいろなものを撮らせようと思っています。石川県昆虫総目録作成作業、海浜性ハンミョウの生態など、クモ以外に時間とエネルギーを取られ、困っています。10月から県教委に毎日出勤せねばならなくなり、これがもっとも困ることです。

### 東條清さん

平成8年10月海南市教育委員会教育委員長に就任しました。しかし勤務は

非常勤ですので、今後もクモの調査研究は続けられます。今後ともよろしくお願ひします。

小笠原幸恵さん

相変わらず無計画にクモの飼育をしています。何か一つテーマを決めて・・・とは、常々思っているのですが。しかし、薄暗い部屋でクモの容器を並べてひとりニヤついている三十女と云うのも、なかなかスゴイものがあるでしょう。フフフ・・・

梶元敏也さん

このところ、イソウロウグモ属の分子系統樹を作るために、クモではなく大腸菌の培養をおもにやっています。ただし、必要なのは大腸菌ではなく、その中に組み込んだクモの遺伝子ですが。この研究のあとは、「クモ糸の性質と機能の進化」に関する問題に取り組んでいこうと考えています。

牧野達也さん

飼育していたヒトエグモの腹面を見ようと、シャーレの間にヒトエグモを入れて、潰れないようにボタンを3つほど入れて観察していたのですが、ボタンが片側に寄ってしまい、さらに薄く圧死させてしまいました。毎日声を掛けて可愛がっていただけに、ショックでした。

清水裕行さん

1. 西宮自然保護協会の活動に参加。(1)1月。総会でクモに関するスピーチを依頼される。クモの毒性・生殖行動などについて語る。(2)2月観察会。六甲山系東おたふく山。樹皮の裏などで越冬中のクモを採集。(3)4月観察会。阪神淡路大震災の震源地である野島断層を観察。岩屋、小倉、江崎で採集。

2. 4月に家族で沖縄に観光旅行をした際に採集。チブサトゲグモほか若干種。

3. 5月に県内一周旅行。丹波～但馬～播磨をドライブ。柏原町、竹野町、生野町で採集。但馬では本庄四郎・山本一幸氏と歓談。

4. 兵庫県在住のナチュラリスト（複数）からクモの標本の提供を受ける。再度カトウツケオグモを獲得。別稿で詳報する。

5. 小中学生採集の標本を同定。1994年の例会で紹介した井上貴博君と弟の智博君の標本を同定。両君は神戸市の作品展で賞を獲得。児童生徒のクモの研究という造網行動の観察が多いので、標本を中心にして生活型の多様性に言及した発表はユニークに映ったものと思われる。

6. 兵庫県産クモ目録（文献上の記録）ほぼ完成。420種を突破。

田中穂積さん

ここ数年は発表もなく、休んでしまっています。大学の授業科目が新しいものになり、それらのノート作りに追われているのが現状です。11月の始め



の1週間ほど、数名でマレーシア、ボルネオ島、クチン (Kuching) に採集に行くことができました。熱帯林を期待していたのですが、この辺は海岸に近く、開けた町といったところでした。数日はクモの採集もでき、これから標本を調べるところです。できるだけ早く発表したいと考えています。

吉田真さん

ミズグモの保護について研究助成金をいただき、西川さんや楯元さんらといういろいろ調べ、面白いことがいくつか分かってきました。来年からは楯元さんと一緒に、引っ張り強度測定機を使ってクモ糸を測定し、クモの糸や網の進化の解明につながる研究をしたいと思っています。

河井安子さん

都会の中に住んでいるとクモを見つけるとうれしくて、すぐに標本にして喜んでいました。採集に行きたくて何度も夢に見た。新種を発見した夢を見て、目が覚めたときは随分がっかりしたものである。

現在、週末は和歌山の山の中で過ごしている。クモが多く、これなら1年後にはいろいろな種類の標本ができると、始めのうちは喜んでいました。

しかし、いざクモと一緒に生活し、朝起きると「おはようさん」とクモに声をかける生活をしていると、我が子のようにいとおしい。従って、標本を作る気が起きない。室内で観察していても、終わると「ありがとう、気をつけてな！」ともとの場所に戻している。産卵後はどうせ死ぬんだから・・・とは思いますが、「おはようさん」の友人をなかなか標本にできずにいる。高校生の時、キノボリトタテグモを3ヶ月飼い、いざ標本にするとき涙が出たときの心境か？

今年の夏、6年生の生徒がクモの研究でここにしばらく滞在する予定である。そうなれば否応なしに、標本づくりをしなければならない。しばしの間、我が友人たちと今の生活を続けていこう。

#### くものいと No. 20 (1996.6.30) 正誤表

- |      |        |  |
|------|--------|--|
| p.17 | 2行目    | 大阪市立博物館→大阪市立自然史博物館友の会  |
| p.17 | 囲み内1行目 | 毒蜘蛛に注意！→毒グモに注意！  |
|      | 囲み内2行目 | Nature Study 41(12), 1995<br>→ Nature Study 41(12):11-12, Dec. 10, 1995. |
| p.19 | 囲み内1行目 | セアカゴケグモ・その後→セアカゴケグモ、その後  |
|      | 囲み内1行目 | 富永修→冨永修  |
|      | 囲み内2行目 | Nature Study 42(1), 1996 → Nature Study 42(1):21-22, Jan. 10, 1996       |

囲み内 5 - 6 行目

(空白部分) → (図 1 ~ 10, 裏表紙のカラー写真参照)

p.20 下の囲み内, 右 1 行目 西川喜朗 → 西川喜朗・桂孝次郎

右 2 行目 Nature Study 42(1), 1996

→ Nature Study 42(1):19, Jan. 10, 1996

左 4 - 5 行目

(空白部分) → (図 2 ; 図 2・3, 裏表紙カラー写真)

## 〈会計報告〉

---

= 収入 =

1995 年度繰越金 69,025

会費 (95 年 11 月から 96 年 12 月まで) 56,000

(95 年度まで 11,000。96 年度 21,000。97 年度以降 24,000)

寄付 3,000

---

合計 128,025

---

= 支出 =

くものいと 18 号通信費 860

くものいとバックナンバー発送費 1,030

くものいと 19 号発送費 6,840

例会案内 (葛城山) 発送費 3,760

封筒代 290

くものいと 20 号発送費 10,450

合宿案内 (神鍋山) 発送費 4,800

例会案内 (葛城山) 発送費 4,800

---

合計 32,830

---

差引残高 95,195

---

<関西クモ研究会>

会長	西川 喜朗
編集	吉田 真
	畑守 有紀
庶務	加村 隆英
会計	山野 忠清

くものいと 21号

発行年月日	: 1996年12月31日
発行者	: 関西クモ研究会 (代表 西川 喜朗)
住所	: 〒567 大阪府茨木市西安威2-1-15 追手門学院大学 生物学研究室内 ☎ 0726-43-5421 (内線 5113 西川研: 5106 加村研)